

ルール、キャッチボール、妙味

文学部 英語英米文学科

田中 和也

私は残念ながら野球にはさほど詳しくはないのですけれども、2022年のプロ野球のクライマックスシリーズ（CS）には、わくわくしました。出自が関西ということもあって、阪神タイガースがまさかのCS進出には注目してしまいました。オリックスバファローズがソフトバンクと接戦をしつつ、最後には日本一になった姿には、感慨深いものがあります。オリックスが日本一になるのは26年ぶりですから、『文彩』を読んで下さる高校生の皆さんの大半が生まれる、8年以上も前だと思います。26年前は私は中学生でしたが、まさか英語を勉強し続けて、なおかつ自分が大学で教壇に立つだろうとは、当時は全く想像していませんでした。このように考えていると、野球と英語学習とを結び付けうるような話を思い出したので、今回一筆とってみようと思います。

野球をやっている私の高校時代の同級生たちが、「どのように野球を上達できたか」を、体育の時間に話してくれたことがあります。もちろん野球が好きなのが第一の理由だが、やはりキャッチボールが基本のうち一つだな、と言っていました。私は体が硬いので、ボールを妙なフォームで投げてしまいますし、近眼かつ斜視なのでキャッチも下手です。けれども、同級生たちの投球を見ると、腕がしなっているのに力も込められていて、なおかつ彼らはボールをまことにソフトにキャッチします。それらを見るたびに、うらやましいし、実に見事だと感じました。彼らはそれらのキャッチボールをごく自然にやっているように見えます。ですが、投球フォームの指導を受けたり自分で研究をしたり、何より反復練習をおこなってきたのだと、見ていて十分に察しがつきました。私には見当が付きませんが、基本の動作を、数えきれないくらい繰り返し練習したのだと思います。それらがあるからこそ、ボールを投げたり受けたりする相手の意図や気持ちが、選手たちには読み取れるのだと思います。

ただ、野球では、投球や打撃などの技術面だけでは、ゲームは成立しません。ゲームが成り立つには、チームメイトたちが、ルールにのっとって連携することが必要だと思います。極端な話、フォアボール（英語では“walk”と言いますね）を無視して、打者によっては勝手にファイブ・ボールなどにすると、打席や打線は無茶苦茶です。あるいは、ある人はホームベースからきちんと一塁に走

るのに、「どうせ一周するならば同じだろう」として三塁に走る選手がいたら、試合は混乱するでしょう。野球に詳しくはない私でさえも、各選手たちが自分たちの持ち場で、他の選手たちに目配りをしつつ、ルールにのっとって自分たちが磨いてきた技量を発揮していることは、試合を見ていて伝わってきます。当然といわれるかもしれませんが、野球という営為が成り立つのも、ルールがある上に、皆がそれを守ろうとするからです。

このような「キャッチボールの技術と、そこでの相手への気持ち」や、それを生かせる「ルール」というのは、コミュニケーションの基本でもあると思います。「会話はキャッチボール」だと言われることもあります。この比喩は核心をついていると思います。「技術」と「思いやり」と「やりとりルール」とが、三位一体で重なり合って如実に表れるのが、外国語学習や外国語でのコミュニケーションだと思います。先に要点を申し上げますと、前述の三位一体を兼ねるのが、文法なのです。たとえば、次のようなやりとりをご覧ください。どう思うでしょうか。私の拙訳も併記しておきます（後で元ネタを示します）。

A: You could have warned me. 「君は私に知らせることができただろうに」

B: Would you have come? 「（そうしたら、）君は来たかな？」

前後の流れをカットしているので、内容が曖昧模糊としているのは、申し訳ないです。ただ、要はAさんはある場所に来ていて、それはBさんに求められたからなのです。なおかつ、BさんはAさんに状況に関する事前情報を伏せられていました。この二点をわかっていただけたら、かまいません。

この二人の会話で注目していただきたいのは、“could have warned”と“would have come”という、助動詞を交えた部分があることです。助動詞というのは、会話のニュアンスを左右するとても重要なもので、料理における調味料のようなものだと思います。調味料で言えば、たとえば塩や胡椒なしでチャーハンを作っても、味がしないただの焦げご飯になってしまいます。これでは、食べてもらう人は、不満になるだけでしょう。これと似ていて、会話に「丁寧さ」、「ためらい」、「決意」などの妙味を加えて、相手に自分の気持ちの手触りを伝えていくのが、助動詞の役割です。おおざっぱに申し上げて、たとえ文法や語句がたどたどしくても、適切な助動詞を用いて polite な表現ができたなら、それだけでも相手は英語を聞いてくれるということは、多々あります。この逆に、例えば「～

してほしい」と言うときに“Please do it.”などだと、とても乱暴になってしまうことも、多々あります。それをたとえば“Can you~?”（～してもらえますか）にすると、丁寧さがかなり増します。さらには、“Could you~?”（～していただけますか）や、もっと丁寧な“Could you possibly ~?”（できれば～していただけますか）とか“I wonder if you could~.”（～していただけたらと思うのですが）とかいった表現があります。これらの助動詞を用いた表現をするだけで、聞き手には「相手は、私の立場を考えて、要望を言ってくれている」ということが伝わります。妙味というのは、非常に重要なのです。

妙味の違いに関して言えば、上記の例で“Can you~?”と“Could you~?”の丁寧さの違いについてお話しました。これら二つは「文法だ、決まりだ」と暗記しているかもしれませんが、実は両者の違いにも、一定以上の理由だった説明がつくと思います。恐らく助動詞を習い始めたときには、「could は can の過去形だ」と習うことが多いと思います。過去に起こったことというのは、もはや修正や消すことができない、手の届かない事柄です。そのため、現在の人からすれば、時間的だけではなくて、心理的にも距離感があるわけです。この心理的な距離感や手の届かない遠さというものは、言ってみたら縁の遠さやよそよそしさに通じるものがあります。ここから、「could は can よりも、相手に対して心理的な遠さを示せる⇒couldの方が丁寧」という流れになるわけです。上記の会話文にしても、“could”や“would”という言葉があるだけで、すでに相手に対してある種の思いやりや意図が見えてきます。こう考えてみると、実は文法には、理屈がつくものが、かなりあると思うわけです。

ただし、上記の会話では“could have”や“Would you have come?”などとあります。あえて呼称を言うことを先延ばしにしてきましたが、これらはいわゆる「仮定法大過去」というものです（実は could 自体、「can の過去形」ではなくて「can の仮定法」というのが、正しいのです）。仮定法大過去というのは、つまりは「現実にはありえないか、もしくは可能性が非常に低かった、過去の状況を表現する」という文法事項ですね。これを踏まえると、Aさんの“You could have warned me.”からは、「もし君が私に知らせようと思ったらひょっとしたらできただろうに（、意図的にやらなかったのだね）」というメッセージが読み取れます。ポイントは、“could have”という刈り込んだ表現一つで、私が「（）」で書いた内容までが、効率よく含意されるということです。これはBさんの返事で見当がつくと思いますがけれども、BさんはAさんに何としても来てほしかった

ので、Aさんの気分を害したりためらわせたりするような情報を、伏せていたということです。このため、「()」の内容には、AさんからBさんへの非難の気持ちが見え隠れしています。それと同時に、Aさんは“could have warned”という、仮定法大過去ゆえに間接性ある表現(=相手を直接は非難しない)を使っていることから、AさんからBさんへの気遣いも、見て取れます。

Aさんの台詞を受けてのBさんの台詞も、あたかもAさんの気遣いをくみ取ったかのように、仮定法大過去の丁寧なものになっています。Bさんの表現をフルで書くと、“Would you have come if I had warned you?”(もし私が君に知らせていたら、君は来ただろうか)ということです。ポイントは、「来ただろうか」とはなっていますが、実際には「来ただろうか、いや来ない」という反語が含意されていることだと思います。これもたとえば“You had to come!”などの直接的な言い方だと、ケンカ腰になるしかありません。Bさんは、Aさんの会話の流れに乗りつつ、丁寧な言い方で相手への気遣いを示しつつ、あくまでBさん自身の意図も表現しているわけです。

以上のようにAさんとBさんとの会話を分析してみましたが、いかがだったでしょうか。日常のこのようなさりげないやり取りでも、文法というものは、確実に血が通った形で、活用されているわけです。繰り返しになって恐縮ですが、助動詞のニュアンスや語順などの基本的なルール、つまり文法がお互いにわかっているからこそ、AさんとBさんは、信頼関係のあるコミュニケーションができています。このように考えてみると、文法というのは、パサパサとした無味乾燥なものなのではなくて、気持ちや意図を伝えるための生きた道具なのだとわかります。仮定法過去や仮定法大過去は、日本語にはぴったりと当てはまるものが無いだけに、私も今でも注意して使います。けれども、そのような一見複雑に見える表現や文法も、実は日常会話で相手に思いを伝えるために重要なのです。

最後になりますが、先ほどのAさんとBさんの会話の元ネタを紹介いたします。これですが、実は2022年5月27日から公開されていた、映画『トップガン マーヴェリック』(*Top Gun: Maverick*)の台詞(正確には、テキストメッセージでのやり取り)なのです。Aさんはトム・クルーズ演じるピート・“マーヴェリック”・ミッチェル大佐です。Bさんは、マーヴェリックの親友かつ上官である、トム・“アイスマン”・カザンスキー大將(演じるはヴァル・キルマー)です。マーヴェリックは、アイスマンの求めで、若い戦闘機乗りたちを鍛え上げることとなります。ただ、そのトレーニングの目的は、達成と生還がきわめて困難

なミッションのためです。何よりも、戦闘機乗りたちの間には、マーヴェリックの亡くなった旧友の息子がいます。これら二点が、マーヴェリックには伏せられていました。友人の息子（しかも、その友人の死に対して、マーヴェリックには自責の念があります）が死ぬかもしれないということを知っていたら、マーヴェリックは命令を拒否したかもしれません。このような意図や、二人のやり取りの奥深さが、たった二行の会話に込められているわけです。

しかもこの会話は、それこそ全くの日常会話です。つまり、日々のおしゃべりであっても、このように仮定法大過去を使うことは十分にあり得るし、使えないと友情も育めないこともあるかもしれない、ということなのです。ハリウッドのアクション大作という気楽な映画を深く楽しむのでさえも、実は文法が必要だということです。このことから、私たちが何気なく使っている言語やコミュニケーションの奥深さや複雑さ、そしてそれらを超えて相手に伝える思いやりや気持ちの妙味に関して、考えさせられます。文法というと冷たくて厳格に見えるかもしれませんが、実は思いやりを直結する、血の通ったものだと、私は思います。高校生の皆さんには、肩の力を抜いて、けれどもより文法に注意して、英語と接していただけたらと願っています。